

パトナム, シドニーの *sprezzatura* 精神

——宮廷世界の美学と「ルネサンス・
ヒューマニズム」の対峙——

平松哲司

ルネサンス文学の詩的トポスの一つに、「無造作の美」、いわゆる *sprezzatura* (nonchalance) の概念がある。Ben Jonson の戯曲 *The Silent Woman* 中の、“Still to be neat, still to be drest,/As you were going to a feast” のカブレットで始まる小品、あるいは Robert Herrick の傑品、“Delight in Disorder” の標榜する “wild civility” はその典型であろう。適度な乱雑さと自由奔放さに気取らぬ美しさを感じる姿勢は、エリザベス朝の審美観を支配した装飾 (Ornament)、技巧 (Artifice) 偏重主義からの脱皮の一つの徴候と考えられよう。

Sprezzatura を知的エリートの美意識の一形態として初めて明確に定義したのは、ヨーロッパ宮廷人の聖書とも言うべき、Baldesar Castiglione の『宮廷人』(*Il Cortegiano*) である。『宮廷人』初版がヴェニスで出版されたのが1528年、Thomas Hoby の英訳版が上梓されたのが1561年である。*Sprezzatura* 精神が、いかなる経路を経てドーヴァー海峡を渡り、イギリス宮廷社会に定着したか、興味尽ないところであるが、少なくとも二つの大きな径路が存在したと考えられる。一つは、George Puttenham の *The Art of English Poesie* (1589) であり、今一つは、*The Defence of Poesie* (1595) を始めとする Philip Sidney の著作活動である。パトナムとシドニーが、*sprezzatura* をどのように理解し、実践したかを探るのが本稿の目的であるが、特に大書したいのは、宮廷を揺籃とする *sprezzatura* と、いわゆるルネサンス・ヒューマニズムとの、複雑、かつ興味深い関係である。後に述べるが、*sprezzatura* は、ギリシア・ローマの

修辞学的伝統の一支流としての側面を持つにもかかわらず、ヒューマニスト達が掲げた基本的理念からはっきり逸脱している。古代ローマ共和制の産物である Cicero 的雄弁を追求したヒューマニズム運動が、君主制政治社会の中核である宮廷に浸透しようとした時、ある種の抵抗、軋轢があったことは想像するに難くない。Sprezzatura 精神は、C. S. Lewis が「新しい俗悪趣味」(“New Vulgarity”)¹⁾と呼んだ、ヒューマニズムの銜学的生硬さに対する、宮廷の批判的解答であり、ヒューマニズム的教養と理想がヨーロッパ宮廷文化の輪郭を決定づけたとする従来の固定概念を修正する上で、恰好の材料となろう。

I

まず、*sprezzatura* とは具体的には何か、カスティリオーネの『宮廷人』のページをひもといてみよう。第一巻の中心的話者であるルドヴィコ公爵は、「理想的宮廷人」という命題を論じる過程で、*sprezzatura* (ホビーの英訳語は“Recklessness”)こそ、宮廷人の至上の美德 *grazia* (grace) を会得する最上の方法であると結論する。舞踏、楽器演奏、チェス、座談といった室内の遊びから、乗馬、レスリング、フェンシングなど武芸一般に至るまで、ある程度の技術的素養を培うことは、宮廷人の必須条件である。問題になるのは、知的に洗練され、鋭い鑑識眼を持つ同輩の前で、いかに自然に、かつ効果的にその素養を「演出」するかである。これ見よがしの自己顕示は、宮廷人の最も嫌悪するものであり、学術的教養を生真面目に吹聴することも、遊びの心を尊び、プロフェッショナリズムの生硬さを不快と感じる宮廷人の美意識には、「野暮」としか映らない。そこで要求されるのが、技巧を隠す技巧、至難の技を演じつつ、無頓着の風を装う能力である。ルドヴィコ公爵は話題を女性の化粧に移し、「笑うと、せっかく塗りたくった顔にひびが入るので、笑うことも出来ない」²⁾ 過度の人工美を揶揄する一方、風になびく、女性のほつれ髪的美しさに象徴される、計算された無造作の美を賞讃している。

Sprezzatura は、無論カスティリオーネの独創ではない。その背後には、古

典修辞学 (rhetoric)、弁辞学 (oratory) の *celare artem* (芸を秘す) の伝統があることを忘れてはならない。³⁾キケロは *Orator* (77-78) の中で、真の雄弁家は、技巧を凝らしたことが一目瞭然である文体を避けるべきで、話者が論旨を伝達する作業に没頭するあまり、華麗な修辞的技術を駆使する余裕がないという印象を与える、多少まとまりに欠け、粗削りな文体の方が新鮮な説得力を持つとして、「綿密なる無造作」の効能を高く評価している。また、「技巧を隠す」ことを、化粧気のない女性の美しさに喩えることも、すでに古典修辞学のトポスの一つとして定着していた。⁴⁾

Sprezzatura に関して特に注目したいことは、無造作の美学が、程度の差こそあれ、偽装、欺瞞の要素を伴うということである。無頓着とは、要するに人を欺く一手段に他ならない。真意と体裁の間の落差を巧みに操作する能力、カスティリオーネ呼ぶところの「慎重なる欺瞞」は、単に宮廷世界の社交技術にとどまらず、あらゆる芸術活動、さらには絶対君主制下の政治運営に至る広い分野において有力な指針、行動原理たりうる。『宮廷人』の世界は、「視線」という鏡で四方を囲まれた空間に他ならない。宮廷人たる者、裸身をさらけ出すことは恥であり、拙策であり、常に「優雅なる偽装」の技術によって真意を巧妙に隠すことが義務づけられる。

II

パトナムの *The Arte* とシドニーの *The Defence* のどちらが先に書かれたかは、実際の執筆時期が双方とも推測の域を出ていないので難しいところだが、70年代、あるいは60年代に溯って書き始められたと考えられる *The Arte* をここでは先に取り上げてみる。⁵⁾ パトナムは、同様の教育を受け、同様の社会的地位にあった同世代人と較べて、格段とコスモポリタンの素養に恵まれていた。彼の念頭にあった読者が、オックスフォード、ケンブリッジ大学、あるいは「第三の大学」の名を冠せられた四法学院 (The Inns of Court) の知的エリート群ではなく、あくまでエリザベス女王を囲む宮廷人であり、さらに *The*

Arte の究極的目的が「無骨な二流詩人を、教養ある宮廷詩人に仕立て上げること」(“to make of a rude rimer a learned and a Courtly Poet”)⁶⁾であることを考慮すれば、『宮廷人』の理念が *The Arte* の中で芽ぶいたのは当然の現象であろう。

The Arte 第三巻、「装飾について」(“Of Ornament”)は、かなりの部分が80年代に書かれたと推測され、⁷⁾ *sprezzatura*への言及も第三巻に集中している。パトナムは詩的装飾、つまり修辭的文彩(“figures of speech”)を、平常の言語的慣習、用法からの逸脱(“abuses or rather trespasses in speech,” pp.159-60)と定義し、その目的を、読者の「耳と心を欺き」、単純明快を敢えて避け、「ある種の曖昧さ」(“a certaine doubleness,” p.160)を醸し出すことにあると定義する。パトナムによれば、比喩表現の本質は、故意に言葉の意味を逆転させることにあり、「意味の二重性、あるいは偽瞞」(“a duplicitie of meaning or dissimulation,” Ibid.)を伴う。この種の眩惑と擬態を巧みに操作する能力こそ、宮廷詩人の欠くべからざる条件であるとするパトナムの認識は、「オックスフォード、ケンブリッジの雄弁家諸氏」(p.145)と彼が呼ぶ、キケロ的雄弁の追求を至上の使命と考えた古典学者の知的潔癖主義と、はっきり袂を分つものである。古典的学識を、自己を一個の芸術作品として完成させるための知的粉飾の一手段と見なすこの宮廷人的感覚は、カステリオーネの宮廷人学の基本的理念であり、パトナムの理想的宮廷人は、学芸の造詣を軽やかにまとう、いわば「教養の着つけ」のルールをまず学ばねばならない。

さらに一歩進んで言えば、宮廷社会の行動学の暗黙の規律と、パトナムの説く詩論の核をなす部分は、*sprezzatura* という共通項で固く結ばれている。パトナムの語彙の中で、“Poetic”と“Courtly”の二語は、真意を偽装し、屈折した形で伝達するという意味において、ほとんど同義語の如く機能している。「詩人の真価が問われるのは、人為的要素を排した自然の雄弁にあり、これ見よがしに技巧を銜うことより、むしろ技巧を巧みに擬装する手腕にある」(p.192)とするパトナムの観察は、そのまま宮廷人の行動学の手引きたりうる。種々の儀礼、序列の網にからめられ、人間の言動の表面的体裁が異常なまでに重

要な意味を持つ宮廷社会において、パトナム説くところの「華麗なる偽装」(*beau semblant*, p.165) は、生存と自己主張の必須条件であったと言える。古典修辞学が、概して文意の明快さを尊び、冗長と散漫を嫌ったのに反し、単刀直入な発言が不粋であり、危険でさえある宮廷世界では、冗漫は時には美德でさえありうる。パトナムの婉曲話法 (*periphrasis*) 解釈はその典型である。婉曲話法を、「言葉の表面に現われない、隠された意図を持つという点で、一種の誑かしである」⁸⁾ と定義し、欺瞞の要素を前面に押し出すことによって、パトナムは従来の修辞学者の婉曲話法に対する消極的評価を根底から覆している。Daniel Javitchの指摘するように、⁹⁾パトナムの「華麗なる偽装」への執着は、ルネサンス・ヒューマニズムの言語観では処理しきれない、異質な美意識の胎動を示唆している。

近年の文学史研究家が、詩＝修辞という16世紀的仮定を再び前面に押し出そうとするあまり、*The Arte* に代表される詩人のための修辞と、主として弁辞学、書簡文の手引きとして書かれた Peacham, Day, Hoskins 等の修辞とでは、「明快」の概念が異なるという事実が曖昧になってしまっている。＜中略＞詩を作るにあたって、弁辞学手引き書に記されている *elocutio* の技巧が不可欠であることは、パトナムも熟知していた。しかし、同時に、彼は詩の本質に敏感であった。雄弁家は、聴衆の理解を得るため、意味の明快に係る規則を守る必要がある。これに対し、詩人の修辞は必ずしもこれらの規則を守る必要はなく、むしろ無視すべきだとパトナムは考えた。

III

Sprezzatura のイギリス宮廷社会への定着を示唆するもう一つの大きな材料に、フィリップ・シドニーを中心とする、“Areopagus” と Edmund Spenser が戯れに呼んだ文学サークルの活動がある。パトナム同様、当時のエリート貴

族の子弟の教育カリキュラムの仕上げとして、大陸の宮廷社会を実際に見聞した経験を持つシドニー、Fulke Greville, Edward Dyer を中心とするこのグループに、『宮廷人』の *sprezzatura* 精神が新鮮な衝激を与えたことは想像に難くない。グレヴィルは、自作の悲劇 *Mustapha* 執筆当時の苦勞を振り返り、テーマの重圧と、美文の粹を凝らそうとする野望のため筆が滞りがちな時、「かの眩惑を旨とする修辭的潤色、アイロニア」(“that hypocritical figure Ironia”) に救いの糸口を見い出したと告白し、「ほんの手遊びに書いたという印象を与えるため、人々は、とかく汗の結晶を玩具扱いしてみせる」¹⁰⁾と述懐している。また、シドニーの伯父、Leicester 伯爵の庇護を通じてグループに参加したスペンサーの *The Shepheardes Calender* (1579) の序文を書いた E. K. なる人物は、¹¹⁾スペンサーが耳馴れぬ古語を多用したことを弁護し、数々の名画において、荒々しい崖や藪の野趣に富む背景が、前面の主題の美しさを引き立てている例をあげ、一種の「自然の^{すさ}荒び」(“naturall rudenesse”)¹²⁾を奨励している。

では、シドニー自身、*sprezzatura* をどのように理解し、評価していたのか？ シドニーと『宮廷人』を結ぶ線は無数にあり、彼がイタリア語版か、ホビーの英訳版で『宮廷人』を読んだことは、まず疑問の余地がない。¹³⁾特に1572年から1575年に渡る大陸旅行は、ヨーロッパの進歩的宮廷人の *sprezzatura* 精神実践を眼のあたりにする機会を若いシドニーに与えたという点で、非常に意義深い。早くからシドニーの政治的手腕を高く評価し、彼を手厚くもてなした William of Orange, Count of Nassau の容姿を、グレヴィルは次のように描写している。

彼の上衣は、はっきり言って、我が国の四法学院の苦学生ですら、昼日中街を歩くのを憚るような代物だった。ダブレットのボタンは外れ、<中略>上衣の下から覗くチョッキは、一介の船頭がよく着る、ウールの手編みの小綺麗なものに毛のはえた程度のものだった。<中略>一般市民と親しげに談笑している様子を一瞥した限りでは、顔を知らなかったら、やん

ごとなき御方である気配や気取りは微塵も感じられず、ただの市井の人にしか見えなかった。¹⁴⁾

シドニーは、弟ロバートへの書簡の中で、自らの悪筆をユーモアを混じえて嘆いているが、¹⁵⁾能筆を官僚的俗才として蔑む貴族的矜持の態度に、シドニーの *sprezzatura* 実践の片鱗が窺われる。

シドニーの *The Defence of Poesie* は、すでにイギリス・ルネサンス詩論の白眉として論じ尽された感があるが、「学識を軽やかに羽織る」*sprezzatura* 精神の視点から、*The Defence* を今一度検討する価値はある。実は、Kenneth Myrick が、*Sir Philip Sidney as a Literary Craftsman* ですでにその作業をしている。*The Defence* が、古典弁辞学の七つの段階から成る弁論構成のルールを、かなり忠実に踏襲していることを、ミリックは鮮やかに検証しているが、ここで特に強調したいことは、*The Defence* の構成の下敷きとなっている古典弁辞学のプログラムがいかに見落とされやすいか、言葉を換えて言えば、いかにシドニーが人文主義的教養を隠そうとしているかである。そこには、学術的「プロ」として蘊蓄を傾けることに対する宮廷人特有の嫌悪感が働いている。シドニーは、*The Defence* が単なる筆の遊びに過ぎぬことを繰り返し訴え、「どういふ悪い星の巡り合わせか、若くして暇を持て余している内に、気がつくといふ詩人と呼ばれるようになった」¹⁶⁾自分の未熟さが、「詩の弁護」という重責に不釣り合いであることを、ことさら強調してみせる。*The Defence* 結論部分で、シドニーの説得にもかかわらず、いまだに詩を敵対視する読者に向かって放たれる「呪い」（「女に恋い焦がれ、ソネットをものする技を知らぬが故、けんもほろろに袖にされるよう。死んでからも、墓石に詩の一編すらないため、貴君の名が、速やかに人々の記憶から朽ちるよう」）は、Donne の “The Curse” の、たっぷり毒を含んだ諧謔さえ彷彿させる。壮重、大袈裟を疎んじる、この anti-climax の手法は、グレヴィル語るところの「アイロニア」の実践であり、『宮廷人』の常套でもある。¹⁷⁾

この種のユーモアを混じえた自己卑下のポーズは、ヨーロッパ古典、中世文

学の修辞学トポス、「故意の謙讓」(“Affected Modesty”)¹⁸⁾に溯り、さらに、古典的法廷弁論の聴衆心理操作の技術にその原型を見出すことができる。¹⁹⁾ 修辞学伝統の見地から言えば、*sprezzatura* は、「故意の謙讓」トポスの宮廷的拡大解釈であり、パトナムの婉曲話法評価の場合と同様、古典修辞学伝統の片隅にひっそりと息を潜めていた技巧が、宮廷的美意識の洗礼を受けて、急激に重要な意味を帯びるに至った好例と言えるだろう。ミリックは、*The Defence* を「古典的雄弁の書」(“classical oratory”)と定義する一方、修辞学的素養を隠蔽しようとする「優雅なる偽装」の努力を重視し、「シドニーの技巧は熟練の頂点を極め、周到この上ないものであるが、自在のものに消化し尽されているので、無頓着の錯覚さえ覚えさせる。〈中略〉ここに我々が発見するのは、高度に完成された故に、技巧とは見えぬ技巧以外の何物でもない」²⁰⁾と結論している。

では、シドニーの実際の創作活動にあたって、*sprezzatura* はいかに機能しているか、*Arcadia* を例にとって検討してみよう。*Arcadia* の評価は、シドニーの *sprezzatura* 精神を正しく把握できるか否かに懸かっていると言っても過言ではあるまい。グレヴィルは、*Arcadia* を、シドニーの天才にもとる、閑散の日々の手遊びに過ぎないと述べ、「当時の流行に迎合し、友人の余興のために書きなぐった小冊紙であり、自らの真価を世に問う種類のものではない」と断言している。²¹⁾ シドニーの妹、ペンブローク公爵夫人の名を冠し、少くとも当初は彼女の個人的慰安のために書かれたこの作品が、*The Defence* 以上に、内輪の、ごく限られた読者のために書かれた事情は、シドニー自身の手になる、妹への愛情が馥郁と薫る序文に明らかである。事実、シドニーの死後、ペンブローク公爵夫人が、未完の原稿を整理、編集し、部分的に手を加えて出版にこぎつける労を惜しんだなら、いわゆる *The New Arcadia* の全貌は、ついに日の目を見る機会を永遠に失っていたかもしれない。

Arcadia を、あくまで妹の退屈凌ぎのための兄からの贈り物に過ぎないとする姿勢の背後には、*Arcadia* を *sprezzatura* の擬装の衣で被うことによって、批評家、特にロマンス物語を「非古典的」と蔑視した、Roger Ascham に代表

されるアカデミズム畑の知識人の攻撃を未然に封じ込めようとする意図が読みとれる。*The Defence* の数多くの場面、例えば、当時の大衆劇の古典的作劇法からの逸脱を弾劾する辛辣さに、我々はシドニーの「ヒューマニスト」としての横顔を見ることができる。しかし、一方で、古代ブリトン人英雄にまつわる民謡に心ゆさぶられると告白し、押韻詩 (“rhyme”) の優秀性を積極的に弁護するシドニーの姿勢に、古典文学規範の盲目的追従を潔しとしない彼の常識人の顔が見える。Homeros, Vergilius の “heroic epic” を最も崇高な文学形式と考えた人文主義的伝統を *The Defence* で忠実に踏襲したシドニーにとって、Sannazaro の *Arcadia* や、Montemayor の *Diana* をモデルとし、恋愛のテーマを軸とするパストラル・ロマンスに手を染めることは、必ずしも誇らしげに吹聴できる行為ではなかった。²²⁾ 現に、*Arcadia* のほとんど絶望的な構成のルースさ、古典的単一プロットを嫌った、C. S. ルイス名づけるところの “polyphonic narrative” の「非古典性」、「ゴシック的混乱」を、ヒューマニスト、シドニーは、どう釈明することができよう？ ギリシア「古典期」文学衰退の後を継いだヘレニズム期の「爛熟」を象徴するロマンス物語に題材を借り、*The Defence* でシドニー自身軽蔑の念をこめて批判している大衆向けロマンス劇の代表的作品とも言うべき *Mucedorus* 誕生に少なからず貢献した *Arcadia* は（因みに *Arcadia* の二人の男性主人公の内一人の名は Musidorus）、*The Defence* のヒューマニスティックな批評観を裏切るものである。「1580, 90年代の偉大な文学作品は、古典劇の“一致の法則”、*Gorboduc* に類する戯曲、英詩ヘクサメターを押し頂くヒューマニスト達が、出来得れば抹殺したかったものである」²³⁾ という C. S. ルイスの発言は、まさにこの点をついている。

ここで重要な意味を持って浮上してくるのが、*Arcadia* 序文の *sprezzatura* 精神である。あくまで身内の娯楽のために書かれた徒然の手遊びに、誰が古典叙事詩のルールを担ぎ出して、重箱の隅をつつくように粗捜しするような大人げない真似をするだろうか？ さらに、直線的単一プロットを破棄し、幾筋ものプロットを勝手気儘に交錯させる polyphonic narrative の無秩序に、卓越した技巧に裏づけられた、整然たる古典的構築美を意識的に避け、荒けずりな

自然のアナキー (“wild civility”) を作品構成の原理に据えようとする「無造作の美学」を発見できないだろうか？ つまり、*Arcadia* の没構造的奔放さは、狭量な古典主義に対する、宮廷的、貴族的侮蔑の表現であると言えないか？²⁴⁾ *Arcadia* の文体は、極度に装飾的であり、徹底して修辭的潤色の技巧を凝らした文章に、シドニーの愛読者でさえ辟易する場面も少ない。仮りに、*Arcadia* の構成が綿密を極め、計算し尽されたものであったら、技巧のあまりの濃密さに、我々は窒息感を覚えるだろう。適度な乱雑と混乱に美を感じる *sprezzatura* は、*Arcadia* という一個の言語的構築物の窓を開け放ち、技巧の緻密さに作品自体が硬直化することを防ぐ「遊び」、「ゆとり」として機能している。

シドニーが、当時流行していた John Lyly の Euphuism, あるいはキケロ的美文の模倣に顕著な、過剰なまでの修辭的技巧追求を侮蔑したことは、*The Defence*, あるいは彼の書簡から明らかである。“Artful”であることが、讚辞、非難、いずれの対象にもなりうる環境で、いかに「技巧なき技巧」を実現するか、言葉を換えれば、Ben Jonson の至言、「人為なくして自然は完全たりえず、自然なくして人為は存在せず」²⁵⁾ をいかに実践するか、その答をシドニーは「無造作の美学」に見い出したと言える。*Arcadia* 中での *sprezzatura* への言及を枚挙する紙面は残念ながらいが、アルカディアの家並みの、陸まじさと独居の趣の共存の不思議さに、Kalander の庭園の適度な乱雑の美しさに、あるいは Philoclea, Zelmane, Helen of Corinth の美貌の描写に、繰り返し現われるのは、“civil wildness”, “a careless care”, “an art of carelessness”²⁶⁾ の表現に集約される、撞着語 (oxymoron) 的発想を喜ぶ *sprezzatura* の技巧である。自己陶酔的修辭ゲームの不毛に陥らぬためシドニーが採った方法は、「汗の結晶を玩具扱いする」ことによって、技巧の粋の跡を消し去ることであった。さらに、技巧の暴走の歯止めとしての「自然」は、すでにそれ自体自然の如く擬装された人工であることを銘記しなければならない——フィロクリアのラドン川での水浴が、擬人法という修辭的技術を駆使することによって、単なる日常行為の写実から、神話的空間での水の精の軽やかな舞踏に変身するように。²⁷⁾

IV

以上、パトナム、シドニーにおける *sprezzatura* の展開と実践の足跡を辿って来たわけだが、何度も浮上してきたのが、*sprezzatura* が、古典修辞学の支流としての側面を持っているにもかかわらず、ルネサンス・ヒューマニズムの言語観としばしば対峙する性格を持つという事実である。「ルネサンス・ヒューマニズム」という言葉は、それを論ずる人の研究分野の違い、定義の枠の大小によって様々に変貌する「亡霊」である。ここでは、定義の枠を簡略化して、C.S. ルイスの表現を借り、ヒューマニストを「ギリシア語と古典ラテン語を教えた人、学んだ人、あるいは少くとも強く奨励した人」、ヒューマニズムを「これらの学問に通常伴う批評原理と批評態度」²⁸⁾と定義する。この定義の単純さに不満を覚えられる方も多いと思うが、現在我々が「ルネサンス・ヒューマニスト」と呼んでいる知識人集団に相当する、パトナム名づけるところの“new clerks”の主義主張、活動分野は、ルイスの定義とほぼ一致している。²⁹⁾

ヒューマニストの最も根強い信念に、古典修辞学、弁辞学的素養が、自然科学、哲学をも含む学問すべてを統合する、教育原理の要であるとする認識がある。ヒューマニストの「普遍的人間像」(*uomo universale*)は、理想的雄弁家に他ならない。ヒューマニストの究極的理想を「雄弁の追求」と定義した Hanna H. Gray の言葉を借りれば、キケロ的雄弁家は、「多岐に渡って学問を修得し、一般市民を代表して社会を治め、力強い弁才をもって、人間活動の知的領域と実利的領域を結合させるかすがいの役割を果たす。」³⁰⁾この章で定義した意味での典型的ヒューマニスト、ロジャー・アスカムは、「完全なる雄弁」(“*perfitte eloquence*”)を「神が人類に与えた最も優れた、最も貴重な能力」とし、さらに「神の摂理」によって、真の弁辞的規範はギリシア、ラテン語にのみ存在するが故に、これら古典語に精通することなしに、母国語での雄弁はあり得ない、とまで言い切っている。³¹⁾

古典修辞学、弁辞学がグラマー・スクールの教育カリキュラムの中核に置か

れ、その結果、修辞学的訓練が一般市民の子弟の手の届くものとなったことは、イギリス・ヒューマニズム運動の最大の貢献の一つである。同時に、イギリス・ルネサンス詩が、いかに多くを古典修辞学の伝統に負っているかも疑問の余地がない。その上で、敢えて、ヒューマニストの信念が忠実に実行されていたら、マーロー、シドニー、スペンサー、シェイクスピアの創作活動は生まれなかったろう、という趣旨の C. S. ルイスの言葉を思い起こしていただきたい。St. Paul's School の創設者 John Colet は、厳格なキリスト教モラルと、恣意的な「古典期」ラテン語偏重の二重の制約によって、Horatius, Ovidius, Catullus をセント・ポールの教育カリキュラムからふるい落とすとした。William Lyly (劇作家 John Lyly の祖父) の、いわゆる『リリーのラテン語文法』の「純粹」なラテン語を頭に叩き込まれた子供達は、ラテン詩の真髄に触れる機会を未然に奪われてしまったのである。ヒューマニズムの掲げた「雄弁の追求」は、多くの犠牲の上に成り立っている。キケロの文体に濃厚な壮重、権威、格調の模倣に没頭するあまり、中世ラテン語の美しさ、アーサー王物語にまつわる中世ロマンス、さらにはペトラルカニズム、Ariosto のロマン的叙事詩 *Orlando Furioso* に代表される新しいロマンティシズムの潮流、すべて「非古典的」、「野蛮」のラベルを貼られ、追放されたのである。アスカムの猛烈な中世ロマンス攻撃は、ある意味では、詩的想像力の自由に対する、弁辞学至上主義からの挑戦状に他ならない。ヒューマニストの教育改革への貢献を重視するあまり、彼等の *homo novus* がキケロ的雄弁家であり、詩人ではないことを再確認することを怠ってはならない。

グラマー・スクール、大学に地歩を固めたヒューマニズム運動が、権力の中核である宮廷に接近しようとしたことは自然の成り行きである。しかし、*sprezzatura* に代表される宮廷的美意識は、ヒューマニズムの銜学的生硬さ、排他性に強く反撥した。ヒューマニストの「雄弁の追求」の下地となる政治的、社会的理念が、宮廷に象徴される君主政治の土壌に馴染まなかったことが第一にあげられる。Augustus に始まるローマ皇帝政治は、キケロ的弁辞学の存在理由を根底から覆した。古典弁辞学は、元老院、フォーラム、法廷が政治的、法律

的決定力を持つ共和制政治を本来の活動環境とする。それに反し、権力が皇帝の意志に集中する社会では、弁辞学の社会的発言力は極端に制限され、活躍の場を失った弁辞学者は、教育カリキュラムと架空の法廷弁論研究に僅かながら活路を見出した。³²⁾ カスティリオーネの『宮廷人』は、14, 15世紀イタリアで、次々と共和制都市国家が倒れ、専制君主が台頭した歴史的経緯を抜きには語れない。³³⁾ 元老院で熱弁を振るい、共和制政治の敵 *Catiline* を完膚なきまで叩きのめしたキケロに象徴される雄弁家像は、君主という絶対権力者を頂点に戴くピラミッド社会の中で、外交、政治交渉は無論、遊興の座においても君主の意向を汲み、助言という間接的方法を通じて国策の運営に参加する「宮廷人」によって置き換えられた。

エリザベスの宮廷においても、事情は根本的には変わらない。ヒューマニズムの理念は、宮廷という異質な環境に順応するため自己変革を余儀なくされる。古典弁辞学は、常に不特定の「群衆」を想定し、話者の真摯の姿勢を印象づける技術を磨き、演説の趣旨の明快さ (*Perspicuitas*) を追求した。しかし、パトナムやシドニーのような宮廷人にとって、知的エリートである同輩の批判の鋒先を軽やかにかわし、かつ君主の意に迎合するためには、弁術を崇高な言語的闘争と考えるキケロ的雄弁は、不都合であるばかりでなく、危険でさえある。シドニーが、エリザベスとフランスのアロンソン公爵の婚姻の噂に触発され、書簡を通じて、婚姻の申し出を拒否するよう進言して女王の怒りを買ひ、ウィルトンに蟄居することを余儀なくされたことは、助言者であると同時に、臣下である宮廷人の地位の不安定さを物語っている。

何らかの形で偽装、欺瞞が生存の必須条件であると密かに感じていたヨーロッパ宮廷社会が、*sprezzatura* の擬態の行動学が『宮廷人』によって公認されたことに万雷の拍手を送ったことは当然だろう。カスティリオーネの説く「慎重な偽装」、「建設的な欺瞞」³⁴⁾ の概念は、ヒューマニズム的弁辞学の不備を痛感していた宮廷人の新しい指針となった。パトナムは、宮廷人の本質は、「巧妙に人を欺く技術」(“cunningly to be able to dissemble,” p.183) にあると公言して憚らない。シドニーも、*The Defence* の中で、「あまり学問のあるとは言

えない宮廷人が、学者よりしっかりした文章を書くことがままある」と指摘して、学者は「技巧を隠す」ことの美德を忘れていると批判している。(p.139) さらにシドニーは、弟ロバートへの書簡の中で、ラテン語を過不足なく読み書き出来れば十分だとし、キケロ的美文の流行(Ciceronianism)を、「オックスフォード最大の悪弊」と慨嘆している。³⁵⁾ これは、後のベイコン、ジョンソン等による反キケロ運動、17世紀散文における「物」(*res*)対「言葉」(*verba*)論争に先鞭をつけるもので、硬直化、末梢化しつつあるヒューマニズム運動への、シドニーの警告として理解されるべきである。

古典修辞学、弁辞学の理念から、華麗なる偽装の行動学、美学への移行は、パトナム、シドニーに限られた現象ではない。「真剣なる遊び」の凝縮である“wit”という新しい雄弁の誕生を、劇作家ジョン・リリーの場合を例にとって検討した G. K. Hunter の力作、J. C. Scaliger とパトナムの詩論を、「ルネサンス・ヒューマニズム」対「宮廷」という図式に沿って比較した H. F. Plett の論文、さらに、16世紀イギリス宮廷社会での新しい審美観の台頭と凋落を綿密に解説した、Javitch の特筆に価する好著が、この事実を証明している。³⁶⁾ これらの研究に共通するのは、ルネサンス文学が、古典修辞学、弁辞学の権威で武装することによって自らの存在価値を正当化した、と言い切ることへの懐疑的姿勢である。こうした反省の根底には、ヒューマニズム運動の「普遍人」がキケロであり、オルフェウスではなかったという認識がある。Javitch も言うように、³⁷⁾ *sprezzatura* に集約される宮廷的 *grazia* の美学、行動学は、真意の伝達を屈折した形で行うことを奨励し、言葉の意味の二重性、曖昧さを積極的に評価する点において、本質的に何らかの言語的、比喩的擬態を必須とする詩作行為の強力な援護射撃の役割を演じた。謙虚と自負、情熱と冷徹、雄弁と寡黙といった背反する概念を、「真剣に遊ぶ」(“*serio ludere*”)の心を通じて共存させる、その手際の鮮やかさに究極的な美を発見した *sprezzatura* 精神は、論理的矛盾のはらむ緊張感、不安定感、あるいは日常的視野の亀裂を糧とする詩作行為そのものに対する宮廷的メタファーと考えることができよう。

パトナム、シドニーは、深い古典的教養を蓄えていたにもかかわらず、ヒュ

ーマニスト的雄弁の追求が、創造的詩作活動を必らずしも積極的に奨励するものではないことを素早く察知した。Wyatt, Surrey, Gascoigne 等チューダー朝初、中期の宮廷詩人の遺産をさらに発展させる形で、パトナムやシドニーが『宮廷人』の理念を実践したことは、大局的に見れば、自らの閉鎖性の故に動脈硬化を起こしつつあったヒューマニズム運動の不備を間接的に批判し、ヒューマニズム運動が忘れかけていた真の *Humanitas* の精神を復活させる刺激的要因の役割を果たすことにつながったと結論してよいだろう。

ノート

- 1) C. S. Lewis, *English Literature in the Sixteenth Century* (Oxford: Oxford University Press, 1973), p. 24.
- 2) Baldesar Castiglione, *The Book of the Courtier*, tr. Charles S. Singleton (New York: Anchor Books, 1959), p. 65.
- 3) Aristotle, *Rhetoric*, 3. 2 (1404b): 3. 7 (1408b). Philostratus, *Vita Apollon.*, 8. 6. Longinus, *De Sublim.*, 22. 1. Cicero, *De Inventio*, 1. 18. 25: 1. 12. 98. *Ad Herennium*, 7. 10. Quintilian, *Institutio Oratoria*, 4. 1. 9: 4. 1. 54—55, 56—59: 4. 2. 59, 126—27.
- 4) Vives の *De Conscribendis Epistolis* と Lipsius の *Institutio Epistolica* に好例が見られる。双方とも Wesley Trimpi が, *Ben Jonson's Poems: A Study of the Plain Style* (Stanford: Stanford University Press, 1962), p. 61, 64 で英訳している。
- 5) George Puttenham, *The Arte of English Poesie*, ed. Gladys D. Willcock and Alice Walker (Cambridge: Cambridge University Press, 1936), Introduction, xlix, li—lii.
- 6) *Elizabethan Critical Essays*, ed. G. Gregory Smith (Oxford: The Clarendon Press, 1904), vol. 2, p. 164. 以下 *The Arte* からの引用は、特に指定がない限り、本書から。
- 7) Willcock and Walker, Introduction, xlvi—xlix.
- 8) *Ibid.*, p. 193.
- 9) Daniel Javitch, *Poetry and Courtliness in Renaissance England* (Princeton: Princeton University Press, 1978), pp. 64—65.
- 10) *The Works in Verse and Prose Complete of the Right Honourable Fulke Greville, Lord Brooke*, ed. Alexander B. Grosart (New York: AMS Press, 1966), vol. 4, pp. 153—54.

- 11) “E. K.” が誰なのかについては、諸説紛々としており、実はスペンサー自身であるとする主張もある。詳しくは、*The Works of Edmund Spenser, Variorum ed.* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1966), vol. 7 (*The Minor Poems*), “Identity of E. K.,” pp. 645—50参照。
- 12) *Ibid.*, p. 8.
- 13) A. Lytton Sells, *The Italian Influence in English Poetry from Chaucer to Southwell* (London: George Allen & Unwin, 1955), p. 132, pp. 92—95. さらに興味深いことは、『宮廷人』の英訳者ホビーとシドニー家の関係である。1552年のホビーの書簡によれば、ホビーは『宮廷人』の英訳の一部を、フィリップの父、ヘンリー・シドニーに送っている。また偶然のいたずらか、ホビーの『宮廷人』初版の印刷者 William Seres は、かつてシドニー家に奉職していたと推測される。以上の情報の出典は、Walter Raleigh 編、ホビー訳 *The Book of Courtier* (New York: AMS Press, 1967), Introduction, xxxiv—xxxv, xxxix.
- 14) *The Works.....of Fulke Greville*, pp. 24—25.
- 15) *The Complete Works of Sir Philip Sidney*, ed. Albert Feuillerat (Cambridge: Cambridge University Press, 1923), vol. 3, p. 133.
- 16) Philip Sidney, *An Apology for Poetry (or The Defence of Poesy)*, ed. Geoffrey Shepherd (New York: Barnes & Noble, 1973), p. 95.
- 17) 例を『宮廷人』第四巻、Pietro Bembo の壮大なネオ・プラトニズム的エロス論にとってみよう。ベンボは、男女間の愛を、神への愛に達する階段の第一歩と規定し、宗教的敬虔の高みまで神秘化する。しかし、接吻以上の肉体関係を認めないベンボの立場が、宮廷人の恋愛観にとってあまりにも禁欲的であることは明らかである。ベンボの高踏な演説のあと、他の話者の口を借りて、ベンボの説く「プラトンの階段」を昇ることが、凡人にとってまず不可能である、という常識の声を挿入することをカスティリオーネは忘れない。『宮廷人』の中では、様々な命題に関して、時として白熱した議論が繰り広げられるが、最終的結論が出ることはまずない。司会役の才女エミリア・ピア、あるいはエリザベータ・ゴンザーガ公爵夫人の介入によって、鋭く対立する論戦は、女性的、情緒的不決断、「遊び」の anti-climax の内に解消されてしまう。
- 18) Ernst R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, tr. Willard R. Trask (Princeton: Princeton University Press, 1973), pp. 83—85.
- 19) Quintilian, 4. 1. 8—10.
- 20) Kenneth Myrick, *Sir Philip Sidney as a Literary Craftsman* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1965), p. 82.
- 21) *The Works.....of Fulke Greville*, pp. 20—21.

- 22) “.....straight I began to thinke that my Tutor, a graue and learned man, and one of a verie austere life, might say to me in like sort, ‘was it for this that I read Aristotle and Plato to you, and instructed you so carefully both in Greek and Latin, to haue you now become a translator of Italian toys?’” John Harington の *Orlando Furioso* 英訳版序文, “An Answer to Critics” から (Smith, *Elizabethan Critical Essays*, vol. 2, p. 220).
- 23) C. S. Lewis, p. 19.
- 24) “There follows only two reproofs, which I rather interpret two peculiar praises of this writer [Ariosto] aboue that wrate before him in this kind. One, that he breaks off narrations verie abruptly, so as indeed a loose vnattentiu reader will hardly carrie away any part of the story: but this doubtlesse is a point of great art, to draw a man with a continuall thirst to reade out the whole worke, and toward the end of the booke to close vp the diuerse matters briefly and clenly. If S. Philip Sidney had counted this a fault, he would not haue done so himselfe in his *Arcadia*.” Harington, “An Answer to Critics,” pp. 216—17.
- 25) *Ben Jonson*, ed. C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson (Oxford: The Clarendon Press, 1947), vol. 8, p. 639.
- 26) Philip Sidney, *The Countess of Pembroke’s Arcadia*, ed. Maurice Evans (Harmondsworth: Penguin Books, 1977), p. 70, 130, 457.
- 27) Ibid., pp. 286—87.
- 28) C. S. Lewis, p. 18.
- 29) G. Smith, vol. 2, p. 12.
- 30) Hanna H. Gray, “Renaissance Humanism: The Pursuit of Eloquence,” in *Renaissance Essays from the Journal of the History of Ideas*, ed. Paul O. Kristeller and Philip P. Wiener (New York: Harper and Row, 1968), P. 206.
- 31) Roger Ascham, *The Schoolmaster*, in *Elizabethan Critical Essays*, ed. G. Smith, vol. 1, p. 6.
- 32) Curtius, pp. 65—66.
- 33) John A. Symonds, *Renaissance in Italy* (New York: Cerf & Klopfer, 1935), vol. 1, pp. 51—97.
- 34) Castiglione, p. 139, 294.
- 35) *The Complete Works of Sidney*, ed. Feuillerat, vol. 3, p. 132.
- 36) G. K. Hunter, *John Lyly* (London: Routledge & Kegan Paul, 1962).

Heinrich F. Plett, "The Place and Function of Style in Renaissance Poetics," in *Renaissance Eloquence: Studies in the Theory and Practice of Renaissance Rhetoric*, ed. James J. Murphy (Berkeley: University of California Press, 1983), pp. 356—75. Javitch の著書に関しては, ノート 9 参照。

37) Javitch, pp. 30—49.